今日の福音書には、私たちになじみ深いイエス様の12弟子の名前が出てきます。

しかし、イエス様はどうして12弟子を選ばれたのでしょうか? 12人だけを特別な使徒にする、という考えはイエス様にはありませんでした。他にも、女性の弟子たちもいたし、最初の殉教者のステファノのような人もいました。おそらく、初代教会の人たちは、アブラハムの子孫、イスラエルの12部族が神の民として信仰を引き継いだように、イエス様は新しい神の民を作られたのだ、ということで、イスラエルの12部族に対応するように、キリストの12部族、12弟子を中心とする教会というイメージができあがったのだと思います。そのことは、ヨハネによる福音書の1章10~12節の『言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。』という聖句にも表れていると思います。イエス様は新しい神の民を作られたのです。その象徴は12弟子ということです。

さて、それでは、イエス様は12弟子に何をすることを目的にして、弟子を集め、派遣したのでしょう。 それは今日の福音書の前半に出てきました。

『群衆が飼い主のいない羊の様に弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。』(マタイ9:36)弟子たちの仕事は、「弱り果てた人を深く憐れむ」ということではないでしょうか。

私たちは、先ず全身全霊で神様を愛すること。そして隣人を自分のように愛することです。教会が伝統的に教えている愛の話は、二つの有名なたとえ話に代表されるでしょう。神様の愛を語るものとして「放蕩息子の話」があり、また隣人愛について語るものとして「善いサマリア人」のたとえがあると言われています。

そして、この神様の愛の話と、隣人愛の話には、共通の大切な言葉が出てきます。

放蕩息子の話の方は、放蕩の限りをつくした息子が回心して、父親の所へ帰ってきたときの場面です。 「彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、 憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。」

サマリア人の話では、サマリア人が通りかかる時の場面です。

「ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。」

「憐れに思う」という言葉が共通します。この憐れに思う、というのが、キリスト教の愛を、より深く表現している言葉なのです。そして、今日の福音書の始めのほうでも、イエス様ご自身が『群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。」となっています。

このことがきっかけとなって、イエス様は弟子たちを選び、その弟子たちを伝道に派遣することが今日 の福音書の要約です。イエス様の伝道の根拠ですね。それではこの、「憐れに思う」というのは、どん な意味なのでしょうか? この「憐れむ」という言葉は、「お腹」とか「はらわた」を意味する言葉です。たとえば、サマリア人の話で、道に傷ついて倒れている人の痛み、苦しみが、自分のお腹に響く、という意味です。「断腸の思い」という言葉があるでしょう。この「断腸」という言葉は、中国の「子を失い悲しみのあまり死んだ母猿の腸が、細かくちぎれていた」という故事からきており、腸がちぎれるほど悲しいこと。悲しみに堪えないこと。らしいのですが。

実際には他の人が傷ついているのに、自分の体が痛みを感じるほどの、痛みの共感ということでしょう。

イエス様の行動というのは、神様が人類の苦しみを見てみぬふりができない、その思いが、イエス様という存在になり、形に表れた、ということです。そして、今日の福音書では、イエス様が働くだけでなく、同じような仕事をする弟子たちを12人選んだ、ということです。

この働きの力の源は、勿論聖霊という神様の力によるものですが、言葉を換えて言うなら、人の苦しみを、自分のお腹で感じて、ほっておけないような、自分のことのように関わってゆく、ということだろうと思います。

サマリア人の話を例に挙げてみましょう。道で追いはぎに会い、半殺しの状態で傷つき倒れている人を、 祭司やレビ人は通り過ぎてしまいました。しかし、外国人であるサマリア人は、その傷ついた人を見て 見ぬふりができませんでした。どうしてでしょう?

このサマリア人は、大勢のユダヤ人に囲まれて、少数の差別される立場で働いていました。半殺しのように、体に傷を負っていたわけではないでしょうが、周りのユダヤ人の心無い発言や態度に遭遇し、心はしばしば傷ついていたと思います。そのような生活上の痛み、苦しみが、他人の苦しみを自分のことのように感じる、鋭い感性を育てさせたのだろうと思います。

そういう意味では、私たちが日常生活で遭遇する痛み、悲しみは、私たちが人のことで「憐れに思う」 「断腸の思いになる」、非常に貴重な体験をしていることなんだろうと思います。

しかし、私たちの日常の経験ですぐにそんな感性が与えられるかどうか、なかなか私たちは鈍い人間なのです。そんな私たちが、人々の痛みに共感するためには、私たちの日頃体験できないことを、疑似体験するような、小説を読んだり、映画を観たりすることが、大変役立つように私には思えます。それは別の言葉で言えば、「感動する」経験をして感性を養う、ということになるでしょう。

クリスチャンである私たちの活動が、人々の気持ちに共感できるものであること、「喜ぶ人と共に喜び、 泣く人と共に泣きなさい。」(ローマ12章15節)という生き方が必要ですが、その根拠は、イエス様 が、多くの群衆に同情し、「深く憐れまれた」というところにあるように思えます。

現在新型コロナウイルスのことで、自粛警察なる者が出現し、弱い立場の人を一層つらいところに追い 込んでいます。しかし、イエス様の弟子である私たちは、弱い人の重荷を担い、共に生活する道を歩む べきだと思います。